



2024年月12月13日発行
公益財団法人 大川美術館
〒376-0043 桐生市小曾根町3-69



石内都〈From Kiryu #1〉2020年

ことば 143

人は時に抱かれ、時に死ぬ。そのつかの間、その一瞬をつかみ取る
その場があるのだと、この町桐生に感じる。

(石内都「時を渡る」『石内都 STEP THROUGH TIME』2024年)

石内都によるオープニングトーク

前号に続いて、企画展「石内都 STEP THROUGH TIME」の開幕日8月10日(土)に大川美術館展示室5において開催された、石内都氏によるオープニングトークの内容を紹介します。

〈Mother's〉

母が亡くなったのは2000年ですけれど、母も大きなやけどをしまして、輸血でC型肝炎になったんですね。定期的に薬を飲まないといけないのに、彼女は「薬は毒だから」って飲まない人だったの。それでちょうど2000年の岡本太郎美術館で現代美術のグループ展があったんですね。その時に震災がテーマで、うちの母は関東大震災と阪神淡路大震災を知っていて、やけどは別のやけどだったんですけれども、実は母が84歳の時の誕生日にやけどを撮ったんです。ちょうどこの時身体の傷を撮っていました。身体の傷も時間のかたちと思って。傷を撮っているんだけど、傷じゃないんだよね、みたいな感じで撮っていたんですけれど。珍しく、いままで嫌がっていた母が「今日は撮っていいよ」って言って撮ったのが母の傷なんです。これが3月の彼女の誕生日で、12月に死んじゃうんですね。びっくりしちゃって。え、お母さん死んじゃうのみたいな感じで。

ちょうど岡本太郎美術館に母と一緒にいこうねって言った日入院したんですね。で2ヶ月で亡くなってしまっ。それでMother'sという。生きている時から母を撮っていたのはほんとに偶然だったんですけど。急に死んじゃったんで、なんかおろおろしちゃって。自分がどうしたらいいかかんなくなった時に、彼女も2ヶ月で死んじゃったから、全然自分が死ぬことをあまり考えていなかったみたいで、日常的なものが家に全部あったんです。タンスを開けたら下着がいっぱい出て来た。それで、もういない母とどうやって会話するかっていうことで、実は母の下着、身に着けた、彼女の身体に触れたものを中心に撮ったのが〈Mother's〉。2000年に亡くなって、2001年から撮り始めた。2002年に名古屋のCスクエアというところで初めて発表したんですけど、その後ヴェネチア・ビエンナーレに2005年に。ヴェネチア・ビエンナーレに選ばれた時に、私は別に〈Mother's〉だけを出すつもりはなかったんですけど、コミッショナーの笠原美智子さんがいて、急に「〈Mother's〉だけでやりたい」って言って来たんです。「え、〈Mother's〉だけでヴェネチアやんの？」って「その方がぜったい分かりやすい」って言うんですね。それで急遽〈Mother's〉だけでヴェネチア・ビエンナーレ日本館の代表として発表しました。その時に思ったのが、わたし



fig.1 〈Mother's〉 展示風景



fig.2 〈Mother's #35〉 2002年

の母の個人的な遺品ですよ、うちの母すごく恥ずかしがり屋だから、下着なんか出したらすごく嫌がるなと思って、だからお母さんごめんねって一応謝ってヴェネチアに持って行きました。結局ヴェネチアに出したときに日本館全館だったのですが、そんなに広いところじゃないんですよ。ヴェネチア・ビエンナーレって美術大学生にとっては憧れの場所で天空にあるようなものだった。決まった時びっくりしちゃって「え、私ヴェネチアに行くの？」みたいな感じで。ヴェネチアに行くのはすごいことだと思っていたから。多分、ファーストクラスだと思ってたの、飛行機が。そしたら普通の、ビジネスでもなんでもない。日本代表で行くの何で？みたいな感じで。初めて内部の事情がわかって、現実のことでヴェネチアに行ったんですけど、3回行ったのかな。そしたら、母の遺品の〈Mother's〉を見た外国の方が泣いていたんですよ。話には聞いていたんですけど、私も現実的に泣いている方を見て、びっくりしちゃって。「そうか、これは私の母の遺品ではないのだ。私から離れて、誰のものでもいい、誰の母のものでもいいものになったんだな。」って思ったの。それで、私は自分の作品が自分の手から離れた感じ、作品として自立したんだなって思った

のが〈Mother's〉、ヴェネチアです。ヴェネチアの時に〈Mother's〉を見たフリーダ・カーロ美術館のキュレーターが私にフリーダの遺品を撮ってくださいって頼みにきたのと、東京都写真美術館で凱旋展をやったときに広島を撮りませんかって声をかけられた。だから母が私に仕事をくれた。広島もそうだしフリーダも呼んでくれたんだなってすごく思う。もう亡くなったのが2000年の12月だからすごく時間が経っていますよね。にもかかわらず、展示する度に新しい発見がある。

アルル国際写真フェスティバル

実はいま、ちょうどアルルっていうところで〈Mother's〉も展示しています。(アルル国際写真フェスティバル、2024年7月1日～9月29日) アルルはフランスですが、展示する場所によって、空気によって、場所の歴史によって見え方が全然違うんですよ。だから同じ作品でもその都度いっぱい発見があって。今回アルルと大川美術館の両方で〈ひろしま〉と〈Mother's〉を展示しています。ついこの間帰ってきたばかりなんですけれど、まったくこの〈ひろしま〉もちがう。今回の〈ひろしま〉は、新作が9点あります。古い100年も経った建物のなか



fig.3 WOMEN IN MOTIONフォトグラフィーアワード授賞式
©Yusuke Kinaka



fig.4

でアルルは展示しています。柱が出ていたり、壁が出ていたり。壁は色を銀と茄子紺に塗りました。同じ写真を違う場所で展示する、そうすると空間が違い距離感が違うから、私自身ひろしまに対する考えも全然違います。〈Mother's〉も含めて、今回20年も経っているのになんか、新鮮なんですよ、見るたびに。アルルになんで行ったかという、初めて行ったんですけど、賞をくれるっていうので行きました。ちょうどアルルのフォトフェスティバルは日本人が40人くらい展示していたんです。私はその一人でしかないんですけど。授賞式はローマ時代の円形劇場、石でできた大きな劇場で授賞式がありました。2500人の観客がいる中で受賞だったんです。私はあまりあがらなかつたんですけど、挨拶する時に何を言おうかと思った時に、40人の日本の写真家が一堂に会するなんてめったにないですよ。だから私は代表として賞をいただいたということ、私の個展と日本の女性写真家展っていう展覧会だったの。それはまさに島隆からはじめて若い方の写真も含めて、別の場所だったんですけど、女性の写真家があれだけきちっと外国で展示されたのははじめてだと思う。それと東北の震災をテーマにしたグループ展もありました。私はその中の一員でしかないわけで。だから日本人写真家のひとりとして、最後に原爆の日が近かったのでヒロシマ・アピールしてきました。ちょうど私の写真集は「ひろしま」という女文字のひらがなのタイトルです。それを全世界に向けて、日本語の4文字を覚えてください。英語やフランス語の文字のひとつつやふたつわかるけど、「ひろしま」を覚えてねって言ってきました。そうしたら、後で「政治家みたい」って言われちゃった。でもそれぐらい言わないと、せつ



fig.5

fig. 4.5 アルル国際写真フェスティバル展示風景

かく行った甲斐がないって思っ。わたしはアルルはあまり興味がないフェスティバルだった。だから初めて行ったんですね。私の写真と傾向が違うところかなって思う感じもあったんですけど。行く前は消極的だったんですけど、行ってしまえば結構楽しいって感じで帰ってきました。写真って、やっぱり日本だけじゃだめ、もう世界に出ないとだめってほんとによく分かった。だから、日本にいと、写真に対する偏見がすごくあって、なんか美術の下に見ているんですよ。でも、現代美術なんです、写真は。現代美術の一環としてもう世界中で認めているのに、日本ってまだまだ写真は写真。写真という枠組みがあって。世界に行くとアーティスト、日本に帰ってくると写真家。肩書はどっちでもいいんですけど、そういう差がすごくあるんです。ですから、外国の写真に対する考え方は進んでいるという



fig.6 〈ひろしま〉

より、ちゃんとしている。写真をちゃんと作品として見てる。そういう現場はやっぱり海外に行かないとわからない。アルルでは〈Mother's〉と〈ひろしま〉、〈Frida by Ishiuchi〉を展示しています。その三つは遺品というテーマです。母が連れて来てくれたフリーダとひろしま。9月までアルルで展示しています。

最後に

私自身はこういう美術館での個展は4回目ですね。東京国立近代美術館フィルムセンター、横浜美術館があって、西宮大谷記念美術館があって、今回この大川美術館。大川美術館は個人の美術館です。大川栄二さんというたった一人の人のコレクションですね。すごいコレクションでちょっとびっくりするくらいのすばらしいコレクションを持っている美術館です。だいたいいつもは松本竣介という若くして亡くなった画家を中心に展示しています。美智子さまが松本竣介を大好きで上皇さまと1999年来ています。洋画が多かったんですけど、今回は写真。まして全館使うなんて私のはじめてなんですけれど。なんでこんなにちゃんとやれたかっていうと、大川栄二さんに捧げようと思ったの。一回しか会っていないけれど、あの時、ちょっと型どおりの写真論だったけれど、「私はこういう写真なんだよね」ってい

うのを大川さんに見せたいと思ったのがすごくあって。全館でできたのはすごくうれしいし、きっと大川さん「うん、そうだね」って言うってくれるかなって思ってます。偶然、全館ということも含めながら、この空間のあり方、小さな部屋がいっぱいあって、もとアパートだったから、この美術館。そのアパートだった部屋に〈APARTMENT〉を展示をしたときに、なんかやったーと思ったの。もとの空間に戻すみたいなことも含めて、写真ってすごく空気とか空間とかに影響されるんですよ。紙っぺらだからね、写真。紙をどうやって利用していくか、どうやってこの空間と空気と何かと、一体化させるか。展示はわたしが全部自分でやります。わたしが指示しないかぎりこの展示はできないから、4日間、10時から5時まで、業者さん男4人を相手に指示しました。結果的に彼等はすごくよくやってくれて、彼等の力がないとできないんですよ。わたしができないことをやってくれる業者さんをほんとにわたしはありがたいなと思って。その結果として、いい展覧会ができたと思います。

展示室撮影：木暮伸也 (fig.1, 7)

編集：大谷明子、小此木美代子 (当館学芸員)



fig.7 〈APARTMENT〉 展示風景

企画展「石内都 STEP THROUGH TIME」 関連トークイベント報告

展覧会会期中、関連トークイベントとしてアーティストをお招きして展示室にて写真家・石内都との対談を開催しました。

伊藤比呂美（詩人）× 石内都

9月15日(日) 14:00-15:30 (展示室5)

石内さんの写真集『1・9・4・7』(IPC、1990年)に伊藤比呂美さんが文章を寄せたことをきっかけに、1995年には石内さんが伊藤さんを撮影し、伊藤さんが詩を書いた『手・足・肉・体—Hiromi 1955』(筑摩書房、1995年)を刊行。本展ではこのときの伊藤さんのポートレートも展示するなかでの対談イベントとなりました。トークの最後には、伊藤さんが死を見つめるなかでエッセイと現代語訳を手がけた「般若心経」の一節を朗読くださりました。



トーク会場風景

長島有里枝（写真家）× 石内都

10月19日(土) 14:00-15:30 (展示室5)

長島有里枝さんは2001年に木村伊兵衛写真賞を受賞し、2024年のアルル国際写真フェスティバルでは日本の女性写真家の歴史に焦点をあてたグループ展「I'm So Happy You Are Here」で石内さんとともに展示されました。長島さんの著書『「僕ら」の「女の子写真」からわたしたちのガリリーフォトへ』(大福書林、2020年)では、1990年代に「女の子写真」と称された写真潮流に対し、その中心的な担い手であったアーティスト自身がフェミニズムの視座を取り入れた「異議申し立て」を行いました。トークではこの著書にも触れ、二人の写真家による貴重なお話を伺えた対談でした。



トーク会場風景

奈良美智（美術家） × 石内都
11月9日(土) 14:00-15:30 (展示室2)

国内外で活躍する美術家の奈良美智さんと石内さんは初対面でのトークイベントでした。スカジャンを愛着している奈良さんと桐ジャンをプロデュースする石内さんが、それぞれジャンパーを着て登壇。奈良さんは青森県三沢市、石内さんは神奈川県横須賀市という米軍基地から影響を受けた経緯もありました。ミュージシャンのデヴィット・ボウイが好きという共通点から音楽談義もあり、初対面とは思えない雰囲気の中でのアーティスト同士の興味深い対談でした。



トーク会場風景（撮影：加納久朗）



展示室6にて

[同時開催]

「Haoru Kiryu」 展示販売・受注会

2024年12月7日(土) ~ 12月15日(日)
PENSEE GALLERY

石内都さんがディレクションする Haoru Kiryu は、きものや帯を新しいかたちのジャンパー「桐ジャン」として生まれ変わらせるプロジェクトです。

桐生は古くから織物の街として栄えました。戦後、横須賀米軍基地を中心に米兵のお土産品として世に出た「スカジャン」は、桐生の職人が手近な縫製技術を用いて製作されました。桐生で生まれ、横須賀で育ち、桐生に移住した石内さんにとって、スカジャンとの出会いは戦後史と個人史とが重なる瞬間でした。自身の母親が遺したきものを故郷・桐生の技術を用いてスカジャンに仕立てたことをきっかけに、この試みを始めました。

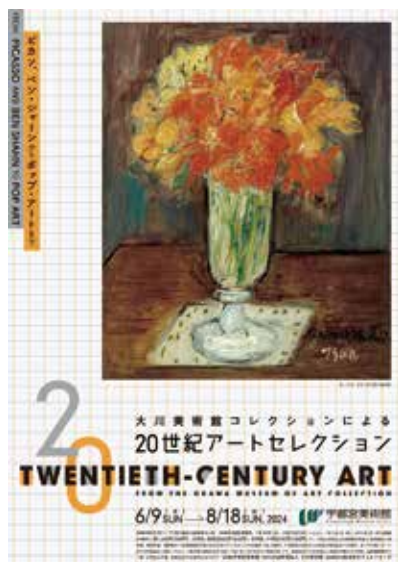
本展との同時開催として、市内のギャラリーにて、Haoru Kiryu の展示販売・受注会が開催されます。



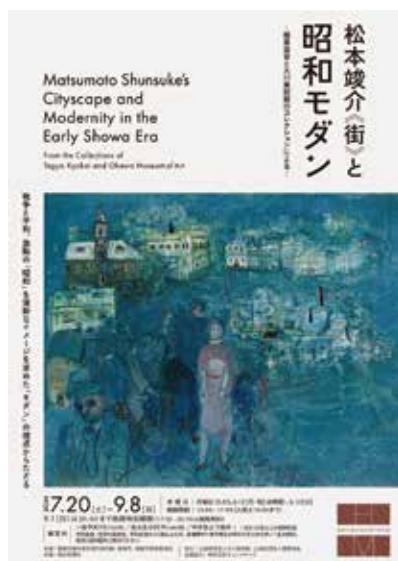
Haoru Kiryu DMより

他館での大川美術館コレクションによる
展覧会開催報告

「大川美術館コレクションによる
20世紀アートセレクション」
2024年6月9日(日)～8月18日(日)
宇都宮美術館



「松本竣介《街》と昭和モダン展
—糖業協会と大川美術館コレクションによる—」
2024年7月20日(土)～9月8日(日)
碧南市藤井達吉現代美術館



他館での大川美術館コレクションによる
展覧会開催予告

「松本竣介 街と人 —冴えた視線で描く—」
2025年1月4日(土)～4月6日(日)
アサヒグループ大山崎山荘美術館



2023年に大川美術館で開催された「生誕110年記念 松本竣介デッサン50」展に出品された作品が巡回します。

大川美術館休館のお知らせ

2024年12月16日(月)から2025年4月25日(金)までは改修工事に伴い、全館休館いたします。

展覧会予告

大川美術館リニューアル記念展
「エコール・ド・パリの画家たちと松本竣介」
(仮称)
2025年4月26日(土)～6月22日(日)
大川美術館